

師走

〔しわす〕 令和5年 12月

一般に先生のことを「師」といい
ますが、一年の区切りの忙しい月で、
人にものを教える先生までも走る月
という意味があります。

発行：北海道神社庁一區教化委員会

清浄に二義あり。謂ゆる内清浄、外清
浄なり。其の心誠一にして神と交わるも
のは内浄の誠一は即ち正直の心なり

日本書紀纂疏

今月のことば

清浄に二義あり。謂ゆる内清浄、外清浄な
り。其の心誠一にして神と交わるものは内
浄の誠一は即ち正直の心なり

日本書紀纂疏

清浄の考え方に、古来から二面がある。内清浄
と外清浄とである。内清浄とは心の清浄であり、
外清浄とは身体の清浄にすることである。心を清
浄にするということの極致は、自分の心を一つに
する。或は真心も持って、心の故郷ともいべき
神の心と一体になることである。

心の清浄とは具体的には何かと問われるなら、
それは「正直」の二文字以外にないと言える。

この教えは結局、清浄とは何かを明らかにした
もので、清浄の極致は「正直」の二文字以外にな
いことを教えたものである。この清浄、正直の教
えは神社にあっては、その根本の伊勢神宮が主と
して強調したものであるが、これが神道一般とし
ても理に適うものとして、日本書紀の解釈のうち
にも取り入れられたのが、本書の主張である。「正
直の頂に神宿る」という教えが、伊勢神宮の教化
の根本にあることを知っておきたい。

（神道百言 一般財団法人神道文化会編より抜粋）

季節のまつり

松迎 正月様迎えの
「門松が立つ」

新しい年の干支にあたる男「年木樵」
が十二月十三日、恵方の山に入って門
松用の松の木を伐ってくることを松迎
えといひます。農耕民族である日本人
は、一年中の耕作と収穫を守る神様を、
「歳神様」、「お正月様」などと呼び、正
月にはこの神様が
門松を伝って降臨
すると信じられて
いました。これが
門松の起こりです。



年の
あわただしい年末に
「市が立つ」

年の暮れ、各所に正月に関係のある
飾り物や羽子板、縁起物などを売る
「年の市」が立ちます。江戸時代からさ
かんになったもので、参詣人が集まる
社寺の境内や門前などに立つようにな
りました。年末になると各地に年の市
が立って、周辺の農漁村などから、正
月の準備のために多くの人が集まっ
てきます。なかには、自分たちが作っ
た飾り物、ほうき、縁起物などを売る
人もいて、農漁業の収入を補い、正月
準備のために貴重な収入源となってい
ました。

東北地方などの年の市は、年末ギリ
ギリになってから立つので「詰市」と
呼び、市によっては、売れ残ったもの
を捨て値で売る事から「捨市」と呼ば
れています。

縁起・縁起物とは？

縁起には三つの意味があります。
第一は、精神的な働きを含む一切の
ものは、種々の原因と縁によって生ず
るという意味です。

第二は、社寺などの成立の由来や神
仏の靈験の伝説、またはそれらを記し
た物のことをいいます。

第三は、吉兆のきざし、前兆の事を
いいます。ちょっとした出来事を吉兆
のきざしと見て、朝に茶柱が立てば

「縁起がいい」といって喜び、正月早々
病気や怪我の話は「縁起でもない」と
いって避けるように、いちいち気にす
ることを「縁起をかつぐ」といいます。

「縁起を祝う」というのは、よいこと
があるようにと祝いをして祈ること
です。「縁起物」はよいことがあるよう
にと、縁起を祝うための品物です。

正月を迎えるにあたり、すす払いを
して、新しい神札を祀り、注連飾りを
掲げて祈り、よきお年をお迎え下さい。

らんよくのおん 卵翼之恩

幼少から育てあげられた親
の恩。父母が大事に子供を
育てる恩をいう。



参考文献
『くらしと祭り百話』小野迪夫（神社新報社）

令和 5 年
2023 年

12 月

日	月	火	水	木	金	土
					1 仏滅 み	2 大安 うま
3 赤口 ひつじ	4 先勝 さる	5 友引 一粒万倍日 とり	6 先負 一粒万倍日 いぬ	7 仏滅 大雪 一粒万倍日 あ	8 大安 こと納め 針供養 一粒万倍日 ね	9 赤口 うし
10 先勝 三りんぼう とら	11 友引 う	12 先負 たつ	13 大安 み	14 赤口 うま	15 先勝 ひつじ	16 友引 さる
17 先負 伊勢神宮月次祭 とり	18 仏滅 いぬ	19 大安 一粒万倍日 あ	20 赤口 一粒万倍日 ね	21 先勝 うし	22 友引 冬至 三りんぼう とら	23 先負 う
24 仏滅 たつ	25 大安 大正天皇祭 み	26 赤口 うま	27 先勝 ひつじ	28 友引 さる	29 先負 とり	30 仏滅 いぬ
31 大安 大祓 除夜祭 一粒万倍日 あ						

二十四節気

【大雪 たいせつ】… 七日

旧暦十一月子の月の正節で、もう山の峰々は積雪におおわれ、平地も北風が吹きすさんで、いよいよ冬將軍の到来が感じられます。

【冬至 とうじ】… 二十一日

旧暦十一月子の月の中気で、この日、太陽が赤道以南の南半球の最も遠い点に行くため、北半球では太陽の高さが一年中で最も低くなります。そのため昼が一年中で一番短く、夜が一番長くなる極点となります。そしてこの日から一陽来復して徐々に日脚はのびていきます。

六曜・選日

〔六曜〕

〔先勝〕… 諸事急ぐことによし、午後よりわるし

〔友引〕… 朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む

〔先負〕… 諸事静かなることによし、午後大吉

〔仏滅〕… 万事凶、思えば長びくおそれあり

〔大安〕… 何事をするにも吉の日、大吉日

〔赤口〕… 諸事油断すべからず、正午のみ吉

〔選日の吉凶〕

〔三りんぼう〕… 三隣亡日、普請始め、棟上大吉日

〔一粒万倍日〕… 出資・投資・購入、新規事業開始

… 婚姻は吉、借りる、離別は凶

七十二候《12月》

冬至

初候・乃東生（なつかれくさしようせい）
夏枯草が芽をだすころ
次候・麋角解（さわしかのつのおとぎ）
鹿の角が落ちるころ
末候・雪下出麦（ゆきわたいておまのひる）
雪の下で麦が芽をだすころ

大雪

初候・閉塞成冬（せふさむふゆとなる）
本格的な冬がおとすれはじまる
次候・熊罾穴（くまあなほら）
熊が穴に入つて冬ごもりするころ
末候・鱒魚群（さけのうおむらがる）
鮭が群れとなって川を遡上するころ

※七十二候とは二十四節気の各節気をさらに3つの候に細分し、一年を七十二に分けたものをいいます。季節の移ろいを気象や動植物の成長・行動などに託して表現したものです。

十三日は、「正月こと始め」

十二月十三日は、江戸時代中期まで使われていた暦では、二十八宿の鬼宿日（きりつ）で、婚礼以外ならすべてのことが吉のめでたい日とされて、正月の準備を始めるにはよい日としてこの日が選ばれました。その後の改暦で日付と二十八宿は同期しなくなりましたが「正月こと始め」の日付は十二月十三日のまま伝わっています。

正月の準備を始めるにあたっては、まず大掃除をしました。正月にはまだ早いですが、汚れた場所を準備するわけにはいかないと考えられて、ほこりだけをなく、けがれも祓い清めて年神様を迎えるための準備を始めました。煤竹売りの売り声が聞かれ、竹の先に葉のついた竹竿が天井などのすす払い用に求められ、「こと始め」の日の風物詩でした。

昔は、この日「松迎え」といって、門松やお雑煮を炊くための薪に必要な木を患方の山に取りに行く習慣がありました。

安産祈願 | 2月の戌の日

6日 (水)
18日 (月)
30日 (土)

*戌の日以外でも安産祈願のご奉仕をしております。神社にお問い合わせください。

祝祭日には
国旗を掲げましょう